

杜詩論集

吉川幸次郎



筑摩叢書 271

筑摩叢書 271

杜詩論集

吉川幸次郎

筑摩書房

吉川幸次郎（よしかわ こうじろう）

1904年 神戸に生れる
1926年 京都帝国大学文学部卒業
1947年 京都大学教授
1967年 退官
1980年 死去
著 書 「吉川幸次郎全集」（全24巻）
「杜甫詩注」（既刊4冊）他

杜詩論集

筑摩叢書 271

1980年12月15日 初版第1刷発行

著 者 吉川幸次郎
発 行 者 布川角左衛門
発 行 所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2の8
電 話 東京 (291) 7651 (営業)
東京 (294) 6711 (編集)
振 替 東京 6-4123
郵 便 番 号 101-91

© Yoshikawa Nobu

1022-01271-4604

理想社印刷・永興舎製本

杜少陵月夜詩釈初稿	3
九日	29
茱萸	50
哀王孫 哀江頭 喜達行在所	52
北征	85
赤脚	106
秦州の杜甫	112
勝跡	132
鼓角	136
初月	147
山寺	156
春雨	160
桜桃	170

倦夜	182
漫興九首	187
四松	195
識り易し浮生の理	204
II	
杜甫と飲酒	209
杜甫と月	218
杜甫と陶潛	228
杜甫と陰鏗	237
杜甫と鄭虔	258
李白と杜甫	292
黒川洋一氏「杜甫」跋	306
芭蕉と杜甫	317
東洋文学における杜甫の意義	326

杜甫の詩論と詩	334
---------	-----

京都大学文学部最終講義

III

文明の年齢	375
杜の宋人を学ぶ	378
杜詩と史実	386
私の杜甫詩注	391
私の「杜甫詩注」	394
杜蹟行	401
中国文学と杜甫	413
解説	425

興膳宏

杜詩論集

杜少陵月夜詩釈初稿

唐の玄宗皇帝げんそうの天宝十四載てんぼうというのは、皇帝在位の四十四年目にあたる。この年と、そのあくる年、すなわち玄宗の紀年でいえば天宝十五載、また玄宗の讓位を受けた新天子肅宗皇帝の紀年でいえば至徳元載、この兩年の間の歴史は、唐の国家にとつても、また杜甫の生涯にとつても、最も小説的な期間であった。わが朝では、孝謙天皇の天平勝宝七年と八年であり、西暦は、七五五、七五六の二年間である。

国家の歴史についていえば、平盧、范陽、河東三鎮の節度使、安祿山あんろくざんが、叛旗を范陽、すなわち今の北平にひるがえしたのは、天宝十四載の冬十一月であった。

祿山が異志を抱いたのは、今に始まることではない。そうした噂は早くからあり、それを玄宗のお耳に入れるものも、少くなかったけれども、玄宗は一向に取り合われなかった。このフォルスタッフのように肥満して、しかも甚だ刺きんなどころのある人物を、皇帝はいつも弁護され、或いは逆に、進言者が罰せられることさえ、稀でなかった。祿山に対する玄宗のこの偏愛は、氣宇の大きな君主に伴い勝ちな放漫さに、或いは甚くものかも知れぬ。しかし必ずしもそればかりではあるまい。四夷の経

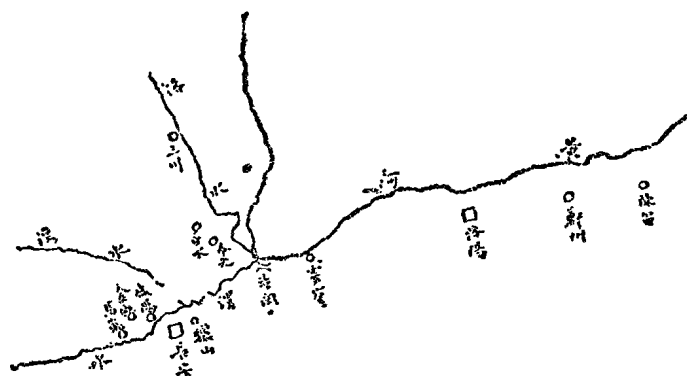
略に志のあった玄宗としては、魁偉な容貌によって示される祿山の武勇と、六種の蕃語に通ずるといふことによっても示されるその才幹とに、期待するところがあつたのであり、この運の強そうな蕃人を駕馭して、一働きも二働きもさせるべき場合の到来を予想し、且つ十分に駕馭しおおせるだけの自信をもっていたのであろう。祿山も玄宗の殊遇に感激し、この年老いた皇帝がなお世にいます間は、輕華をさし控える積りであつたといわれる。

ただ国都長安の朝廷には、あくまでも祿山と並び立たぬ勢力があつた。それは右丞相の楊国忠である。貴妃楊太真の従祖兄として、中央の政柄をほしいままにしていた国忠にとり、祿山の存在は、眼中の釘であつた。祿山の謀叛を最も熱心に予告したのは、国忠であり、むしろその謀叛を激発せんとした。長安なる祿山の下屋敷は、警吏の搜索にあい、留守居役のものが取り調べを受けた上、秘密裏に処刑された。また祿山が代官として長安にとどめおいた吉温は、澧陽の長史に左遷された。

遂に意を決した祿山が、兵を挙げたのは、天宝十四載十一月九日である。君側の奸、楊国忠を除くことを名として、二十万の兵馬は、范陽城を進發して、南を指した。

時恰かも玄宗は、毎年の恒例の如く、驪山の温泉に、寒を避けていた。最初の報知を受け取つた時、なお半信半疑であり、祿山に反感を抱くものの誣告であらうとした。しかし十五日に至り、事態は決定的なものとなつた。御前会議に出席した楊国忠の面上には、おのが予言の適中に、揚揚として得意の色があつた。

十六日には、北庭の都護として、西方の守備に任じていた封常清が召され、征討の方略を下問された。十七日、常清は、官軍の先鋒部隊として、東都洛陽に赴いたが、越えて翌十二月二日には、やは



り西辺の守臣として名のある高麗人、高仙芝が、征討軍の総帥として、東方に進発した。ひきいるところは、新募集の兵士五万人であったが、そのおおむねは訓練を経ぬ市井の子弟であった。

その頃、賊軍は、既に黄河の北岸にせまっていた。平盧、范陽、河東と三つの節度使を兼ねていた祿山にとり、黄河以北の地は、本来その管轄であり、且つ世は四十余年の太平に、兵を知らぬこと既に久しい。抗戦の意思を抱く地方があつても、防備はおおむね粗略であつた。賊軍は、疾風の枯葉を捲く如くにして、黄河の北岸に達し、十二月三日靈昌県に於いて黄河を渡ると、六日には陳留を、十日には鄭州を、更に十三日には、遂に東都洛陽を陥れた。官軍の先鋒封常清は、西にのがれて、総帥高仙芝と合し、潼関にたむろしたが、目附の宦者辺令誠は、長安にはせ帰って、皇帝に謁見し、仙芝と常清は、戦略を誤ったばかりでなく、数数の不正をも働いていると、奏上した。皇帝は激怒

し、兩名に死を賜うた。勅書をたずさえた官者は、潼関駅にとつて返すと、まず常清を駅の南の西街にとめない、勅書を示した。常清は、あらかじめ用意してあった上奏文を取り出し、その執奏方を依頼した上、刑に服した。総帥高仙芝も、この処刑の場に立ち合っていたが、正庁まで引き返した時、官者はいった、「閣下にも御諒が下っております」。仙芝は階を下り、常清の処刑された場所まで引き返すと、見物の兵士どもを見まわして、いった、「負けたのは、わしが悪い。しかし兵糧をくすねたの、恩賜品をどうしたのと、それは違う。もし盗みをしたというが実ならば、諸君、実といえ、嘘ならば、諸君、枉といえ」。兵士たちは一斉に「枉」と叫び、その声、地をどよもした。仙芝は、任命以来、刑死に至るまで、一と月弱であった。

仙芝の後任としては、やはり西陲の宿将、哥舒翰が起用された。この人物は、突厥人を父とし、胡人を母とする。安祿山が、胡人を父とし、突厥人を母とするのとは、あべこべであった。いつかの御宴の席上、祿山がそのことをいい出したのに、哥舒翰が変にからんだというので、喧嘩になり、以来兩人はずっと不和であった。この度の任命は、こうした不和の関係を、逆に利用せんとしたものであるが、この色を好む大將は、中風を病み、自邸で療養中であった。

しかし命を拝した哥舒翰は、高仙芝の旧部下をも接收して、都門を辞し、総勢二十万、東のかた潼関にたむろした。病後の將軍は氣力に乏しく、部下の統制も、理想的ではなかった。かくて潼関を隔てて、官軍と賊軍とがあい対峙する中に、天宝十四載は暮れて行った。

翌天宝十五載正月元日、祿山は洛陽に於いて、帝号を僭称して雄武皇帝といい、国を大燕と号した。しかし哥舒翰は、なおじつと潼関の險要によったまま、更に東して洛陽を衝こうとはしなかった。こ

れは必ずしも病將のものぐさばかりには基因しない。しかるべき主張もあることであつた。賊は必ずしも民心を得ておらぬ。今に内部から崩潰する。今打つて出るのは、官軍の利益でない。

事実、東方の形勢は、必ずしも賊軍に有利でなかつた。平原の太守顔真卿がんとしんけいをはじめ、義軍が所在に奮闘したことは、賊の後方を不安にし、祿山は一時、洛陽を抛棄して、范陽への後退を決意した程であつた。ただ朝廷の空気は、哥舒翰の消極的な態度に甚しくあきたらなかつた。ことに右丞相楊国忠は、都近くにゐる哥舒翰が、クーデターを起こしてはと心配した。督促の使者は、踵を接した。半年にわたる駐屯ののち、六月四日、哥舒翰は、胸を撫して慟哭し、兵をひきいて関を出た。かくて、七日、賊將崔乾祐さいけんゆうと、靈宝県に戦つて大敗し、手勢わずかに数百騎と、潼関に逃げ込んだ時、部将たちは、賊軍への投降を、哥舒翰に勧告した。「公は二十万の衆ありしに、一戦にして之れを棄てたまひぬ、何の面目ありて復た天子に見えたまわんものぞ、且つ公は高仙芝のを見たまわざる乎」というのが、勧告の理由であつた。哥舒翰が勧告を拒絶すると、部将たちは、中風で不自由な哥舒翰の足を馬の腹にくくりつけ、鼓噪して東軍に投じた。潼関の守りは、ここに全く潰え去つたのである。時に天宝十五載六月七日である。この日、いつもならば無事の知らせとして、長安から望見される烽火の煙が、いつ迄たつてもあがらなかつた。皇帝の憂慮は、始めて深刻になつた。

十日には、御前会議が開かれた。劍南の節度使を兼任し、蜀の地方に勢力を扶植していた楊国忠は、蜀すなわち今の四川の地に行幸あらんことを奏請し、皇帝の意向もほぼそれに傾いた。翌十一日には、市街の空気が、いちじるしくあわただしくなり、楊貴妃の二人の姉、韓國夫人、虢国夫人が、楊国忠のむねを受けて参内し、蜀への御幸を、更にすすめまいらせた。十二日、皇帝は、南の内裏なる興慶

宮から、北の内裏なる大明宮に移られた。夜に入ってから、竜武大將軍の陳玄礼が、秘密裏に召され、近衛兵の整備を命ぜられた。あくる十三日の朝まだき、車駕は延秋門を出て、西に幸した。楊貴妃の横死という悲劇は、この途上で起る。宋の司馬光の「資治通鑑」には、その間の経緯を、次のように叙している。

乙未の黎明、上、独り楊貴妃姉妹、皇子、妃主、皇孫、楊国忠、韋見素、魏方進、陳玄礼、及び親近の宦官宮人と与に、延秋門を出でたまう。妃主皇孫の外に在りし者は、皆な之れを委てて去く。

食の時、咸陽の望賢宮に至る。中使は吏民を徴召せしも、応ずる者有る莫し。日は向に中ならんとするに、上には猶お未だ食したまわず。楊国忠、自ずから胡餅を市いて献じければ、是に於いて民争いて糲飯を献じ、雑うるに麦豆を以てす。皇孫輩、争いて手を以て掬い食らうに、須臾にして尽き、猶お未だ飽く能わず。上、皆な其の直を酬い、之れを慰勞したまう。衆皆な哭く。上も亦た泣を掩いたまう。

老父郭從謹なるもの有り、進み言いて曰わく、祿山の禍心を包蔵するは、固より一日のことに非ず。亦た關に詣りて其の謀を告げまつる者も有りしかど、陛下には往往之れを誅したまいしかば、使に其の姦逆を逞しくするを得、陛下をして播越を致さしめしなり。頃ろより以来、在廷の臣は、言を以て諱むべきものと為し、唯だ阿諛して容れられんことをのみ取む。是を以て關門の外のことを、陛下は皆な得て知りたまわざりき。草野の臣は、今日のこと有らんと必ず知ること久し。但だ九重は蔽遂なるをもて、区区の心、上達に路無かりき。事もし此に至らずんば、臣も何

に由りてか陛下の面を覩たてまつるを得て、之れを訴えまつらんやと。上の曰わく、此れは朕の不明にして、悔ゆるも及ぶ所無しと。慰諭して之れを遣らしむ。

俄かにして、食の尚、御膳を挙げて至る。上には先ず從官に賜えよと命じたまい、然る後に食したまいぬ。軍士をして散じて村落に詣りて食を求めしめ、未の時に、皆な集まりて行かんと期す。夜る將に半ばならんとして、乃ち金城に至る。県令は亦た逃れ、県民も皆な身を脱して走れりしかば、飲食器皿、具さに在り、士卒以つて自給するを得たり。

時に従う者多くは逃げ、内侍監の袁思芸も亦た亡げ去りたり。駅の中には灯無く、人びと相い枕とし藉りて寝ぬ。貴きも賤しきも復た弁つに以無し。

丙申、馬嵬駅に至る。將士飢え疲れて、皆な憤怒す。陳玄礼、禍いは楊国忠に由るとて、之れを誅せんと欲し、東宮の宦者李輔国に因りて、太子に告ぐ。太子は未まだ決することあらざりしが、会かも吐蕃の使者二十余人、国忠の馬を遮りて、訴うるに食無きを以つてす。国忠未まだ對うるに及ばざるに、軍士呼ばわつて曰わく、国忠は胡虜と反を謀れるよと。或るもの射て鞍に中てしかば、国忠は走りて西門の内に至りしとき、軍士追いて之れを殺しぬ。肢体を屠割し、槍を以つて其の首を駅門の外に掲げ、并せて其の子なる戸部侍郎の暄、及び韓國秦國夫人を殺しぬ。御史大夫の魏方進、汝曹、何んぞ敢えて宰相を害めしぞと曰いしに、衆は又た之れをも殺しぬ。

軍士、駅を囲む。上には誼しく諱ぐを聞こしめして、外には何事かあると問いたまいぬ。左右のもの国忠の反せるを以つて對う。

上、杖つき履はきて、駅の門を出で、軍士を慰勞し、隊を収めよと令りたまう。軍士応ぜず。上、

高力士をして問わしめたまう。

玄札こた対えて曰わく、国忠、反を謀れるうえは、貴妃宜しく供奉すべからず、願わくは陛下、恩を割きて法を正したまえと。

上の曰わく、朕、当に自ずから之れを処るべしと。門に入り、杖に倚り首を傾けて立つこと、久らくしたまう。京兆の司録なる韋諷、前み言いて曰わく、今や衆の怒り犯さからい難く、安危は晷刻きやくに在り、願わくは陛下、速かに決したまえと。因りて叩頭して血を流す。

上の曰わく、貴妃は常に深宮に居るに、安んぞ国忠の反謀を知らんやと。高力士の曰わく、貴妃は誠に罪無し。然れども将士は已に国忠を殺したるなり。而るに貴妃にして陛下の左右に在らば、豈に敢て自ずから安んぜんや。願わくは陛下、審かに思いたまえ。将士の安んずれば、陛下も安らげくましまさんものをと。

上、乃ち高力士に命じて、貴妃を仏堂に引き、之れを縊り殺さしむ。尸を輿せて馱の庭に寘き、玄札等を召して、入りて視さしめたまう。

玄札等、乃ち胄を免ぎ甲を釈き、頓首して罪を請う。上、之れを慰勞して、軍士に曉し諭さしめたまう。玄札等皆な万歳を呼ばわり、再拜して出づ。是に於いて始めて部伍を整え、行く計を為す。

丁酉、上、將に馬鬼を發したまわんとするに、朝臣は唯だ韋見素一人のみ。

行くに及び、父老たち皆な道を遮りて留りたまえと請う。曰わく、宮闕は陛下の家居にして、陵寢は陛下の墳墓なるに、今は此れを捨てて何いずくに之ゆきたまわんと欲すると。上、之れが為めに

轡を按むること久しくしたまい、乃ち太子に令り、後に於いて父老に宣慰せしめたまう。

父老因りて曰わく、至尊既に肯えて留まりたまわずんば、某等願わくは子弟を帥い、殿下に従いて東のかた賊を破りて長安を取らん。若し殿下と至尊と、皆な蜀に入りたまわば、中原の百姓をして、誰か之れが主たらしめんものぞと。須臾にして、衆は数千人に至りしが、太子、可きたまわず。曰わく、至尊には遠く險阻を冒したまう。吾れ豈に朝夕だにも左右を離れまつるに忍びんや。且つ吾れは尚お未まだ面のあたり辞ごいしたてまつらず。当に還りて至尊に白し、更に進止を棄くべきにと。涕泣し馬を蹴して西せんと欲したまいしが、父老は共に太子の馬を擁み、行くを得ざらしむ。

太子、乃ち広平王の倂をして、馳せて上に白さしむ。上には轡を総えて太子を待ちたましいしが、久しく至らざりければ、人を使りて偵わしめしに、還りて状を白す。

上曰わく、天なりと。乃ち後軍の二千人、及び飛竜の厩馬を分ちて、太子に従わしめ、且つ將士に諭して曰わく、太子は仁孝にして、宗廟に奉う可し、汝曹善く之れを輔佐せよと。又た太子に諭して曰わく、汝勉めよや、吾れを以って念とする勿かれ、西北の諸胡は、吾れ之れを撫なづくること素と厚し、汝必ず其の用きを得んと。太子は南に向いて号泣したまうのみ。

かくて、楊貴妃を伴わぬ玄宗の車駕は、西南成都に向かつて去り、太子は西北の辺疆、靈武の地にのがれ、群臣の推戴によって帝位についた。それが肅宗皇帝であり、年号も至徳元載と改元になった。開元天宝の盛世は、ここに全く終りを告げたのであり、以後何年かの大乱は、ここに始まる。後年、詩人が賀蘭鉞に寄せた詩の言葉を借りれば、「朝野歎娛の後、乾坤震蕩の中」である。半世紀にわた